

初めてのロシア

中村 龍介

私が初めて外国の土を踏んだのは学生最後の年、一九六五年の夏だった。典型的な貧乏旅行で、旅費を節約するため、横浜から船でナホトカに渡った。当時のソ連は鉄のカーテンで西側とは仕切られた、怖い国との印象が強かった。

一方、日本でロシア語を学び、東京オリンピックでは通訳を務めた。更に、至難と言われた通訳案内業（ガイド）の国家試験にも合格し、ロシア語には相当に自信があった。私のロシア語が本場でどの程度通用するのか是非試してみたい。田舎の道場で腕を磨いた剣士が他流試合に臨むのに似た期待を胸に秘めていた。

初めてロシアの大地に足を下ろした私は、高揚感に後押しされて、少しナホトカの町を歩いてみることにした。

首からカメラを提げ、革靴を履いた東洋人は珍しいとみえて、子どもたちが近づいてきた。服装は一樣にみすぼらしく、裸足の足には突っかけを履いている。

「ユー、ジャパン？」

中の一人がカタコトの英語で話しかけてきた。

「そうだ。日本から来た学生だよ」

ロシア語で答えると、子どもたちから一斉に歓声上がる。と、見る見るうちに人数が膨れ上がった。ロシア語を喋る変なガイジンが居るぞ、と仲間に宣伝したのだろう。その数十人以上。可愛い女の子の姿もある。女の子だけをカメラに収めたかったが、そうもいかない。全員を集めて記念写真を撮った。様々なポーズを取る無邪気な子供たちに別れを告げ集合場所に戻った。

日本からの観光客は一箇所に集められ、ハバロフスク行き列車を待つのだ。当時のソ連では西側からの訪問者に自由行動は許されていなかった。

ハバロフスクからモスクワまでは飛行機。シベリア鉄道も魅力だったが、一週間以上かかる。飛行機でも当時のターボプロップ機で十時間。何しろロシアは広いのだ。

機が滑走路を離陸して上空にさしかかると、眼下に雄大な景色が広がった。シベリアの大地を曲がりくねって流れる大河、アムール川だ。中国名を黒竜江という。まさにその名のとおり、大蛇にも似た黒い竜が緑の平野をゆっくりと進んでいく光景を連想させる。咄嗟に写真心が湧いてきて、バッグからカメラを取り出すと、何度もシャッターを押した。

「ダワイチェ！」

振り向くと、通路ではロシア人スチュワーデスが無表情に手を差し出している。カメラを寄せと言っているのだ。

そうだ！ ソ連では、空港の写真や高所からの俯瞰撮影は厳禁されている。今ごろ思い出しても遅い。黙ってカメラを渡した。背中が冷や汗でビッシヨリ。大変なことをしてしまった。隣の日本人が哀れみの眼差しを向けるのを感じながら、今度は不安が頭の中を支配した。

この先、どうなるのだろうか。モスクワに着いたら警察に引き渡されるのだろうか。それとも罰金？ カメラは没収されるだろう。ひよっとすると、フィルムを抜いた後、返してくれるかもしれない。甘いか？

モスクワまでの十時間、ありとあらゆる妄想が去来した。そして、モスクワ到着。裁判所で判決が言い渡される瞬間はこんな感じかもしれない。複雑な気持ちのまま最後に出口に向かう。扉のところには先ほどのスチュワーデスが変わらぬ無表情で立っていた。鬼の形相に思えた。私の顔を認めると、黙って手を伸ばし棚の上から私のカメラを取り出した。

「パジャールスタ（どうぞ）」

心なしか笑顔を見せてカメラをそのまま返してくれた。先ほどまでの形相が一変、天使の微笑みに変わったのだ。

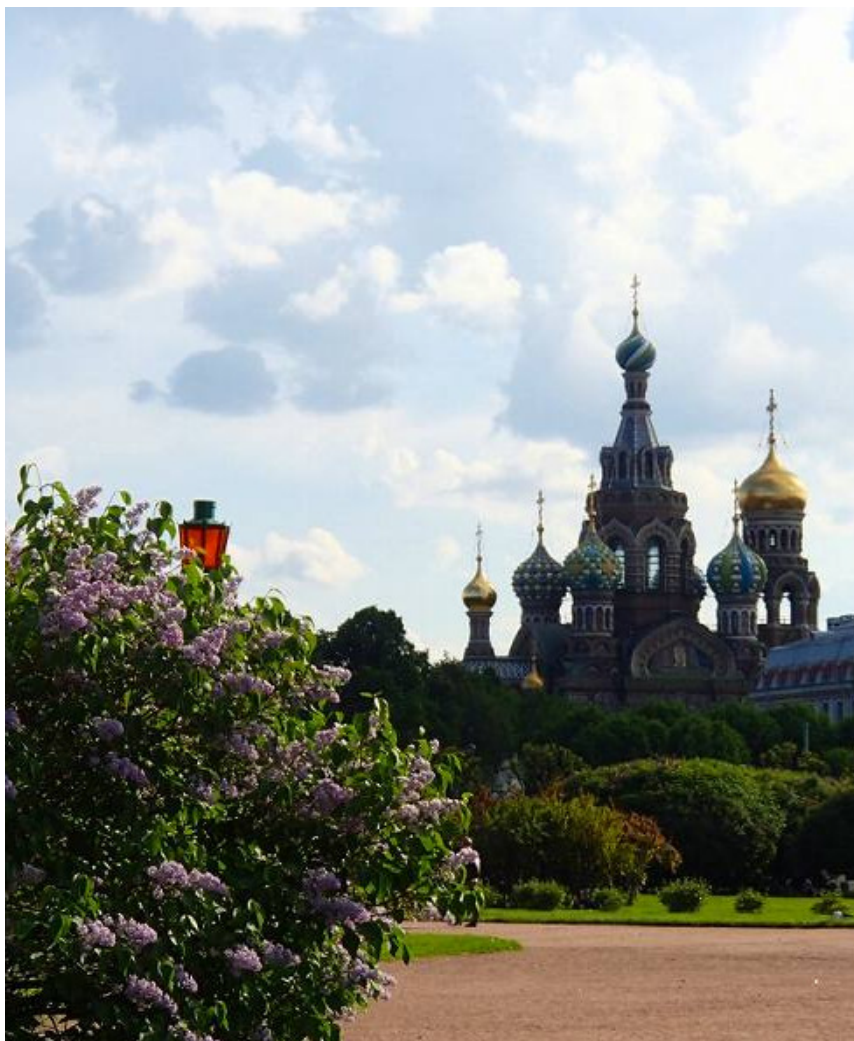
「バリシヨーエ・スパシーボ！（ホントに有難う）」

私は感謝の気持ちを前面に出して笑顔で受け取った。

「スチャストリーババ・プチー（よきご旅行を）」

捨てる神が拾う神に転じた瞬間であった。

そのことがあってから半世紀が過ぎた。当時の社会主義国、ソ連も今はない。新しい国、ロシアが誕生して十年以上経つ。前途洋々だった若者も今は七十翁。行かず後家の次女と二人、



「血の上教会」、サンクト・ペテルブルグ

ロマノフ王朝のアレクサンドル2世は1881年この地で暗殺された。息子のアレクサンドル3世が父親を悼んで、その場所に25年の歳月をかけて建設したとされる。

東京の片隅で余生を送っている。

今年の三月、その次女から突然の提案があった。

「今年はロシアに行かない？ 淳子は、前々から行きたかったんだ」

私の賛同を得て、淳子は早速、会社に休暇の申請を出し、旅行社にパッケージ・ツアーを申し込んだ。

五月の終わり、三十人ほどの団体で出発することになった。会社時代には仕事で何度かモスクワを訪問したが、ソ連崩壊後のロシアは知らない。文字通り初めてのロシアである。

八日間の旅はそれなりに楽しかった。すっかり変わってしまったモスクワの街並みやサンクト・ペテルブルグの美しい建築には目を見張るものがあった。

とはいえ、五十年前の一人旅で経験したほどの新鮮な驚きや感動は少なく、所詮は年寄りの感傷旅行の域を出なかった。加えて、伝家の宝刀と誇っていたロシア語も、鞆の中で錆付いて咄嗟に抜けないか、抜いても錆だらけの刃では、あまり使い物にならなかったことも告白しておく。

(了)

〔二〇一三年六月記 原稿用紙五・五枚 課題「不安と期待」〕